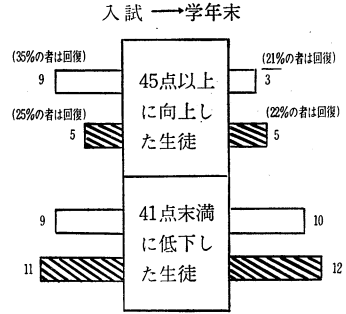
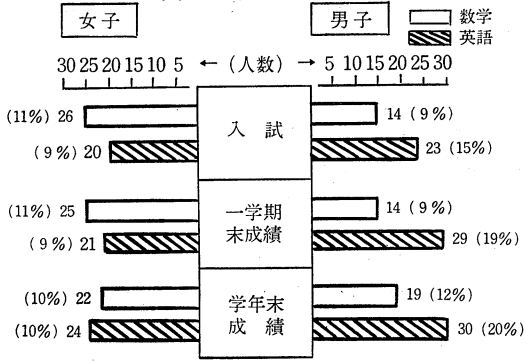


図1



四十点以下の生徒数
(入学者選抜学力検査では得点×2)

図2



いる。

これに対して女子の低学力者の数学で若干減り、英語で若干増えた。しかし、国語、社会、理科などでは減少し、努力しているといえそうである。ここで、入試で二十一点未満だった者で、学年末に四十五点以上(「三」の評定)に向上した者が、数学で男女計十二名(三十%)、英語で十名(二十三%)いたが、他は相変わらず低迷している。

入試得点が、二十一点以上だったのに、学年末で四十点以下に低下した生徒(数学十九名、英語二十二名)と共に、今後の指導が待たれるところである。(図1・図2)

(四) 学習指導法改善のための研究
ア 経過

本校生の実態(多方面から調査し分析したがここでは省略)に対応して、それぞれの生徒の目的を達成させることの急務から、昭和五十六年度末近く、教務部に「学力向上対策小委員会」が設置され、各種の調査分析、学習指導法の改善策、教務上からみたその実施の見通し等が研究された。そして、昭和五十七年度には、特別委員会の「学力向上対策委員会」が設置され、十数回に及ぶ委員会並びに職員室で、対策が討議された。

イ 内容と方法

昭和五十八年度からは、数学、英語の二教科について習熟度別学習を

実施する。また他の教科においてもそれぞれ指導上の工夫を重ねる。英語の場合

(昭和五十七年度入学生)

科目	内容
英語 II	週三時間を各クラス共通に学習
英語 II B	週三時間を「基礎講座」「普通講座」に分け、少人数で授業をすすめる。この場合二クラスを三講座に分け、うち一つを基礎講座とする。両講座とも教材は同一のものを使用する。
英語 II C	英語 II B

。数学の場合

(昭和五十八年度入学生)

科目	内容
数学 I	六単位のうち、二単位については実施する。講座開設数は英語にはほぼ同じ。

尚、講座編成にあたっては、生徒の希望を主とし、学級担任・教科担任の助言指導を加味する。また差別意識の生じないように留意し、組替え(講座替え)は原則として行わない。

(六) 個別指導の強化

本校の教育過程では、二年より文系、理系の二コースに分かれ、科目の選択も行われる。さらに新たに習熟度別学習が導入されたのであるが、これまでより一層個別指導を充実させた。

ア 教科・科目・講座・コース等の選択決定にあたっての、適切なガイド

ンス

イ 生徒の学習目的、特別活動、教師友人、親との関係、身体的欠陥、病気等について、問題や悩みの有無のチェックと適切な助言

ウ 個別指導をとおり、教師の学習指導の進め方への工夫改善
エ 保護者との面談

四 反省

研究初年度ということもあって、その大半を研究方法の模索に費やしたきらいがある。また、初年度のねらいが生活の実態を調査し、追跡分析することにあつたため、具体的、組織的に低学力者に対し、効果的と思える処置を施すまでに至らないまま終ってしまつた。しかし、職員間に「現状のままではいけない、何か手を打たなければ」という点で共通理解が得られたのはよかった。

五 おわりに

今後の課題として、

- (一) 基礎学力の追跡及び調査の継続
 - (二) 習熟度別学習の実施、及び各教科の学習内容や学習指導法の工夫改善による学習の実施
 - (三) 個別ガイダンスの充実
 - (四) 研究報告のまとめ
- などを行っていく計画である。

(教頭 大谷安亀)